

〔書評〕

浅倉有子編著

『漆器からみるアイヌの社会と文化』

大坂 拓

はじめに

本書は、二〇二一～二〇二三年度科学研究費（基盤研究（B））「モノ資料からみる近代アイヌの社会と文化」（研究代表者：浅倉有子）の成果をまとめた論文集であり、二〇一三～二〇一五年度科学研究費（基盤研究費（C））「アイヌ漆器に関する歴史的研究——文献史学と考古学、民俗学・文化人類学の連携」（研究代表者：同上）及び二〇一六～二〇一九年度科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ漆器に関する学際的研究」（研究代表者：同上）の成果を盛り込み二〇一九年三月に刊行された『アイヌの漆器に関する学際的研究』（北海道出版企画センター）の続編として位置づけられている。

研究期間の初期はコロナ禍による行動制限の只中にあり、その後、二〇二二年二月のウクライナ戦争勃発により、かねて交流を続けてきたロシア連邦サハリン州郷土博物館での現地調査は事実上不可能となった。こうした困難な状況に置かれながらも着実に研究を進め、その成果を速やかに刊行されたことに対し、まずもって深く敬意を表したい。

アイヌ漆器については、古く杉山壽栄男・金田一京助の共著として一

九四二年に刊行された『アイヌ芸術 金工・漆器篇』（第一青年社）で網羅的な記述がなされたものの、その後は具体的な研究の進展が乏しい状態が長く続いてきた経緯がある。アイヌ漆器は基本的に全て和人社会からもたらされたものであり、独自の「伝統」に注目する傾向が強い人類学者にとっては関心の埒外であったこと、アイヌ社会で宝として珍重されてきた漆器は長期に亘って伝世された可能性を想定せねばならず、モノそのものから歴史学的な検討を進めることも容易ではなかったことなどが、取り組みの乏しさの背景にあったものと考えられる。ようやく二一世紀に入り、器種単位の基礎的な分類が着手され（藪中剛司二〇〇九「蛸唐草文様のトゥッキ（杯）について」『北大植物園研究紀要』九ほか）、また古原敏弘を中心とするグループにより基礎資料の集成（二〇一四『アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究』神奈川大学日本常民文化研究所）がなされたことで、アイヌ漆器研究は改めて適切な出発点に立った。本書の編者である浅倉氏らによる一連の研究は、こうした新たな流れに掉さしつつ理化学的分析、文献史学、物質文化研究の融合によってアイヌ漆器の生産と流通の解明に挑んだものであり、本書はその取り組みの現段階での到達点である。

本書の多岐にわたるテーマを全面的に論じることは、評者の力量を遙かに超える。ここでは理解の及んだ範囲で各論文の概要を紹介したうえで、二三のコメントを加えることで読者のご海容を請いたい。

一 本書の構成と概要

本書は、「Ⅰ 幕別町のアイヌ伝世漆器」、「Ⅱ アイヌと漆器Ⅰ」、「Ⅲ アイヌと漆器Ⅱ」の三部構成となっており、Ⅱ・Ⅲはおおよそ近世・近代の時代順とされている（一頁）。ただし、文献史学の成果を除けばその区分はさほど厳密なものとはなっていない。ここでは理科学的分析、五、文献史学五、考古学・物質文化研究二の計十二の論考・資料紹介と、絵画を対象としたコラム一からなるものと捉え直し、各分野の論考・資料紹介について掲載順に紹介することとした。

理科学的分析

四柳嘉章「幕別町蝦夷文化考古館所蔵アイヌ伝世漆器の化学分析―塗膜分析からさぐる漆器の品質・産地・年代―」は、北海道十勝地方の幕別町蝦夷文化考古館（施設リニューアルのため二〇二三年三月末を以って閉館）に所蔵される漆器について多角的な分析を試みたものである。同館所蔵資料の多くはチロット集落（現・幕別町千住）に生まれたアイヌ民族の指導者吉田菊太郎氏（一八九六―一九六五）が地元及び周辺地域で収集したものとされている。収集地・収集年代が比較的明確な資料群を分析対象としている点で、本論で提示された個別の知見は今後の研究の一つの基点となり得るだろう。

宮腰哲雄・浅倉有子・Olga Alekseevna Shubina「千島列島シヤスコタン島から出土した漆器の特徴と化学分析」は、二〇〇八年に千島列島中部シヤスコタン島で行われた発掘調査で出土した漆器について、炭素一四年代測定の結果から室町時代半ばから安土桃山時代に製作されたものとし、さらにストロンチウム同位体分析から日本産の漆を使用したもの

であることを指摘する。

本多貴之「アイヌに伝わる漆工品の分析―余市地方の出土漆器および新ひだか町伝世漆器の科学的分析―」は、北海道後志地方に位置する余市町内の遺跡出土資料二点、北海道日高地方に位置する新ひだか町教育委員会が所蔵する伝世資料二〇点について、熱分解ガスクロマトグラフィ―質量分析をおこない、ともに日本産の漆だけでなく東南アジア産の漆が使用したものが含まれていることを指摘する。

宮腰・山田千里・浅倉「アイヌの漆塗り行器等の特徴と化学分析」は、新ひだか町博物館所蔵資料二点、余市水産博物館所蔵資料三点の計五つの行器・貝桶を分析し、いずれも木胎にヒノキ、下地に砥の粉を用いていることから、木胎にヒノキアスナロ、下地に珪藻土を用いるとされる石川県輪島産の製品ではなく、京都府山城産との推定を示す。

同じく宮腰・山田・浅倉による「アイヌの漆塗り片口の特徴と化学分析」は、新ひだか町博物館所蔵の片口一点を岩手県二戸市浄法寺歴史民俗資料館所蔵の類例三点と比較し、形態・塗膜構造等の一致から、新ひだか町博物館所蔵の片口が浄法寺産であるとの推定を示す。

文献史学

谷本晃久「アイヌ漆器」を用いる和人」は、和人社会からアイヌ社会に持ち込まれた漆器がアイヌ社会では独自の作法で使用されていた事実をあらためて確認したうえで、そこで生まれた「アイヌ漆器」としての作法が、ウイマム・オムシャといった公的な場面で和人の側にも共有される局面があったことを指摘し、異文化の存在を前提とした「近世蝦夷

夷地在社会」の特質の一端と位置づける。

三浦泰之「資料紹介 場所請負人の経営帳簿に見る漆器」は、西蝦夷地ヨイチ場所の請負人林家が残した六点の文書から、文政〜慶応期の漆器流通に関連する情報を提示する。

松本あづさ「近代北海道における交換品の「需用」と「無用」は、前書『アイヌの漆器に関する学際的研究』に掲載された「明治初年におけるアイヌ向け漆器の仕入れについて」に続くもので、近代初頭に開拓使により「下賜」が廃止され、続いて交易品からの「無益之物品」の排除が指示されたことにより近世的な漆器の流通が終焉を迎え、それに代わるものとして「宝物商」が出現したとの見通しを示す。さらに、そうした変化が直ちにアイヌ社会における宝としての社会的機能の消滅を意味するものではなかったことを指摘し、「相続」の意味が大きくなった可能性を提起する。

浅倉「明治一〇年代の静内アイヌに関する素描」は、まず開拓使期の土地所有について検討し、日高地方の静内郡に居住するアイヌの約半数が貸与地として海産干場を確保していたことを確認し、続いて明治一五年の大福帳の分析から、「サカツキ」（台盆と推定）を入手する「かなりの経済力」を持ったアイヌ二名の存在を読み取っている。この論点は、瀧澤正が類似郡を対象として進めた分析（瀧澤正二〇〇八「明治初年アイヌ昆布漁家の『経営』と『家計』」『北大史学』四八ほか）を参照しつつ、隣接地域の状況を具体的に明らかにしたものとなっており、同時に、「無益之物品」としてアイヌ向け漆器の交易品からの排除が指示されたのちの状況を具体的に跡付けるものもなっている。

菅原慶郎「近代初頭におけるアイヌ民族と和人の経済的關係」は、明治前半期の十勝地方を取り上げ、内陸部への和人の進出に伴う経済的關係の変化を論じる。その中ではアイヌとの毛皮取引で大きな利益を上げる和人男性の存在も指摘されており、同時代の公文書に「奸商」と記された人々の足取りを具体的に示す一例として興味深い。

佐々木利和「描かれた漆器」は小品ながら、著名な『蝦夷島奇観』に描かれた漆器をアイヌ史・アイヌ文化に関する該博な知識をもとに解説したもので、後学へ範を示したものといえよう。

考古学・物質文化研究

清水香「アイヌ文化における漆器の需要について」は対象を漆器に限定せず、北海道内出土資料から所謂「移入品」の動向を幅広く論じる。

藪中剛司「三沢市教育委員会所蔵の蛸唐草文様の漆椀について」は、小川原湖民俗博物館（現在は閉館）に所蔵されていた「蛸唐草文様」が施文された椀について、アイヌ社会向けに生産されたと考えられる製品が和人社会に残されていた事例と位置付け、生産地や流通経路の解明を今後の課題として挙げる。

二 本書の成果と課題

以上のように、本書はアイヌ漆器研究の到達点を総花的に示すものとなっており、とりわけ様々な手法を用いた理化学的分析の成果は、将来的な資料の蓄積により多くの事実が明らかになることを予感させるもの

といえる。現状ではなお個別的なデータの提示に留まってはいるものの、今後、物質文化研究の手法により各器種の分類を確立したうえで、確実なバックデータを伴う資料を選定し、各分類群単位に理化学的分析を実施するといった戦略的な取り組みをおこなうことにより、より見通し良く説得的な議論を展開することが可能になるものと思われる。

また、文献史学の各論考からは、従来は史料的な限界から新たな展望が見出しにくいと見なされがちであったアイヌ近代史研究に、いくつもの新たな突破口が開かれつつあるとの印象を強く受けた。今後の展開に大いに期待したい。

なお些末な点ながら、本書ではアイヌ語の音節末子音のカタカナ表記に揺れがあり、エトウヌブ「片口」と近年一般的な表記法に則った箇所もある一方(二四五頁)、「エトウヌブ」(二二四頁)・「エトウヌツプ」(二六四頁)などの表記も頻出し、不統一が気になった。またチセノミ(新築祝)を「チセイノミ」と記すなど(二二六頁)、古い文献の誤った記載を注釈なしに引いた部分もある。最近ではアイヌ語の辞典類が豊富に刊行されており、一部は国立アイヌ民族博物館が運営する「アイヌ語アーカイブ」等で手軽に参照できるようになっている。校正の際に一手間かけることをお奨めしたい。

おわりに

以上、甚だ雑駁ではあるが本書の成果を紹介してきた。二〇〇八年の衆参両院における「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」、

二〇一九年の「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」制定を経て、今やアイヌ文化・アイヌ史に関する関心はかつてないほどに高まっていると言われる。そうした社会的状況の中で、アイヌと和人の「交流」の実態を示すものとしてアイヌ漆器研究の重要性はますます高まっていくものと思われる。まぎれもなくアイヌ漆器研究の到達点と今後の課題を示すものとして、本書の役割は極めて大きなものとなるだろう。

(B5判、二九六頁、北海道出版企画センター、二〇二四年三月三〇日発行、本体価格五五〇〇円+税)

(おおさか・たく 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター学芸主査)